
2人で1人の勇者様

ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

2人で1人の勇者様

【Nコード】

N7364Y

【作者名】

ハル

【あらすじ】

桜庭優と紅葉穹は両親がおらず、2人ぐらし。そんな2人が家を出たら異世界に召喚されて勇者になっていた。1人は大魔術師、もう1人は精霊術師となり2人で1人の勇者となる。名前だけ勇者は魔術学校に通い、そこそ日常での、ほのぼのバトル展開をお楽しみに。最後に説明下手ですいません。

召喚（前書き）

まずはじめに、こんな小説を読んでいただき、ありがとうございます。

召喚

入学式に行こうと家を出た、桜庭優だ。さくらば ゆうそして今、親友の紅葉穹は。あかば そら家から出た瞬間に、目の前が真っ暗になり、目の前に変なオッサンがいた……。

「なあ穹、俺達って……入学式に行く途中だったよな？」

「そうだね。僕達は普通に家を出たら、ここにいたと思うよ」

そう2人はいつも通りに一緒に家に出て、今日から始まる高校の入学式に参加しようとしていたのだ。それが、何故こうなったのかは2人に全く心当たりが無かった。

「君達が異世界から来た者達か？」

2人にとっては、目の前のオッサンが話してる意味など言葉は分かっても、全く理解していないだろう。

「あなたが言っていることが全く理解できないのですが」

穹の言葉にオッサンが少し考える。

「お父様、いきなり召喚されたのです。状況が飲み込めてないと思います……」

「おおそうだった。いきなりここに召喚したんだ。混乱するのも無理はない」

オッサンの隣には、いかにも王女様と思われる美少女が座っていた。その容姿は長い銀髪に翡翠色の目、それにその思わず見惚れてしま

うほどに整った顔が印象的だった。

と言うことは、オッサンはもしかしたら国王様なのかもしれない。

「ここが日本でないなら、僕達が異世界から来た者だと思います」

こういう時の穹は冷静に物事を考えられる。

それとは逆なのが、その隣にいる優だ。

「なら、君達が異世界から来た者だ。ここはスビル王国。君達の日本と言う国は聞いたことがない」

「話は変わりますが、僕達はどうして異世界に召喚されたのですか？」

穹はあまり感情を顔に出さない場合が多い。そして、今も顔に出さずに冷静を装っている。そんな穹の心情が分かるのは、生まれてからの、ほとんどの月日を過ごした優だけだ。

「うむ、それも話さなくてはならないな」

「つまり、君達は勇者として召喚されたんだ」

「「はい？」」

優と穹は声を揃えて答える。これも、過ごした月日が成せる事だろう。

「勇者と言うのはな、戦争にならないための抑止力としての役割がある。勇者として異世界の者を召喚するのはこの国だけだが、どの国でも勇者は最強の名を有する」

2人は言葉に詰まる。脳の処理能力の方が追いつかないのだ。

「つまり、俺達は戦争の時には戦うけど、それ以外ではただの勇者って称号持つてただけってことですか？」

「そういう風に捉えてもらってもよい」

「でも勇者が2人ってのはどうしてなんですか？勇者って普通は1人だと思うのですが」

そう、普通は勇者は1人。漫画やゲームの世界では勇者は1人しかいないだろう。

「君達2人で勇者だからだ」

王様の答えは2人で1人の勇者らしい。

2人で1人と言うのは、中学卒業と同時に2人だけで生きてきた2人にとってピッタリな言葉だ。

「それで、勇者を引き受けてくれるか？」

この質問に対する答えは決まっている。断っても元の世界には帰れないだろうし、無理矢理にでも勇者にするだろう。

「いいぜ！」「分かりました」

返事に2人の性格が現れてるが、これが2人なのだ。

それに、2人とも勇者と言うのは満更でもない。

活発的な優はともかく、それとは対照的な穹までもが…。

「では、勇者の腕輪を」

どこからか魔術師のような格好の男が来ていて、手に持った盆の上の腕輪を差し出してくる。

「それは、その国の勇者にしか着けられない。それも勇者の人数分だけ用意されるらしい。今までは1人しかいなかったが、今回は2人で1人だからな」

王様が笑いかける。それを無視して2人は腕輪を手取る。触れた瞬間に激しく光り、いつの間にか優と穹の手首には腕輪が着いていた。

「その勇者の腕輪は所有者の望む形状に変化し、その能力を発揮できる。あとは、腕輪が教えてくれるとしか、書いていない」

王様は先代の勇者が書き記した本に書いていたことを述べる。

「それでは2人には魔術学校に入り魔術を学んでもらう。それまでに初級魔術を娘のフェルミに習いなさい」

王女のフェルミがこちらに一礼してから近づいてくる。

「あ、あの、よろしくお願いします」

優の手を握って挨拶する彼女の表情を見れば、今の彼女の心情が手に取るように分かるだろう。

「優、いきなりフラグ立てるところは流石だよ」

優も穹もかなりのイケメンだ。2人とも自覚はしていないが、お互いがモテることは理解している。

「えっ、フラグなんて立ってないだろ？」

自覚なしの優にとっては、いつも通りの反応だし、この光景も特別珍しいというわけでもない。

「それでは、今日はゆっくり休んでください。明日から、この国の地理や歴史、魔術と簡単に教えるので」

「はい」「分かりました」

優は気のぬけた返事で、穹は事務的に返事をする。

召喚（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

特にお気に入りと評価お願いします。

契約

異世界に召喚された日は、フェルミが2人を城の中を案内した。そして2人はと言えば、城で出た見たこともない料理、フカフカすぎるベッドを堪能したのだった。

「優さん、穹さん、早く起きて下さい」

フェルミが直々に2人を起こしに来る。本来の客人は起こしに行かないし、王女が行ったりなどするはずがない。

つまり、異世界から来た人物、あるいは勇者とはそれほどの存在だと言うことだ。

ただ、今回の場合は少し意味が違う。

「早く起きて魔術の練習をしないと、入学式までに初級魔術もできませんよ？」

そう、一週間後は魔術学校の入学式で、初級魔術から始めるが、それぐらいは出来て当たり前なのだ。

「……おはよう」

穹が先に起きる。

だが、その隣のベッドで寝ている優は一向に起きる気配がない。

「てい」

「いってえ！穹、何すんだよ？」

穹が布団をめくって、太ももを思いつきり抓ったのだ。それは尋常じゃない痛さだっただろう。

「優が起きなかったからね。ちよつとしたスキンシップだよ」

「限度つてもんがあんだろ！」

「起きない人が悪いんです」

穹は意外と子供っぽい一面もある。今回がいい例だろう。

「あのお、食事が終わったら、魔術の練習をしたいのですが……」

「りょーかい！」「分かりました」

恐る恐ると語り掛けるフェルミに、2人はそれぞれの返事を返した。

朝食を取りながら、フェルミが予定を話し終わる。

「じゃあ、朝と昼は魔術で、夜は歴史と地理を日にちごと。つてことよろしいですか？」

「はい、それで間違いありません」

穹が事務的に質問し、それに、フェルミも答える。

穹は基本的に馴れない相手には、敬語や余所余所しい態度を取って

しまうのだ。

「魔術ってどんなのをやるんだ？」

「まだ説明してなかったですね」

魔術には、いくつか種類がある。

魔法、精霊術、この2つを纏めて魔術と呼ぶ。

魔法は自らの魔力を使い、不可能を可能にする力。

例えば、何もない場所から火を生み出すことも、不可能なことを可能にしたという捉え方もできる。

次に精霊術は、自らの魔力を使い、精霊を召喚する力。

例えば、火の精霊を召喚し、その力を剣に纏わせたりできる。他にも精霊を使って魔法紛いのこともできる。上位の精霊になると、その精霊の属性の魔法を打ち消すこともできる。

魔法は発動が早いのと、応用が効く。

精霊術は威力が大きく、上位精霊にもなると天災のようなことも起こせる。

お互いに利点があるので、どちらの方が優秀というわけでもないのだ。今の時代まで生き残っているのだ。

「と言うわけです。何か質問はありますか？」

一通りに魔術のことを説明したフェルミに、優が手を挙げる。

「はい、ユウさん」

フェルミの顔が少し赤い。やはり一目惚れをしていたらしい。

「魔法と精霊術は分かったが、両方使えたりするのか？」

「基本はどちらかしか使えません。ですが、歴代の異世界から来た勇者の方々は、両方使えたりらしいですよ」

「じゃあ、俺達も両方使えるのか？」

「それは、そうなんではないでしょうか。ちなみに私は魔法の方を使います。それと、精霊術師は数がそんなに多くないので、魔法使いの方が多いんです」

ここで穹が手を挙げる。

「あの、精霊って……契約とかいるの？」

「契約は必要ないはずです。呼べるか呼べないかですしね。あつ、精霊王と上位の精霊は契約が必要らしいです」

「なら、僕は使えると思います、精霊術」

「どうゆうことか説明して頂いても？」

さっきは両方使えるかとは言ったが、両方使える人間を見たことがないので、少し信じきれない部分があるらしい。

優が言っていたら、信じてたかもしれないが……。

「昨日の夜に夢を見たんです」

「内容を話してもらっても？」

穹は小さく頷く。



『小僧、力を求めるか？』

真っ白な空間にいる穹は、目の前にいる女の子から質問を受けた。

女の子は、見た目的には同じ年くらいだが、その内側に大きな何かを感じる。それが精霊王の魔力なのだが、穹には未だに正体が分からない。

『小僧、力を求めるか？』

「同じ年くらいなのに、小僧はやめてもらえますか？」

同学年の女の子に小僧と呼ばれて、いい心地はしないだろう。

だが、白くて長い髪に、赤い目、そして整った輪郭の彼女には、その言葉が可笑しかったのか小さく笑みを浮かべる。

『小僧、精霊王である私に、そんなことを言ってきたのは小僧が初めてだ』

「そりゃどうも」

『小僧は、力を望んでここに來たのだろう?』

「貰えるものなら、貰っていきますよ」

『何のために力を望む?』

穹は少し考える。

「今の僕にとって大切なものは、親友で家族の優だけです。ですが、これから大切なものが増えても、僕が守れるぐらいの力は欲しいかな」

『つまり、他人を護るために力が欲しいのか?』

「そういうことです」

『おもしろい。ならば、私が小僧と契約してやろう』

「けっこうです」

予想外の答えに精霊王が固まる。

『では、力がいらぬのか?』

「それはいります」

『だから、精霊王の私が力になってやろうと……』

「分かりました。で、僕はどうすればいいんですが？」

『私と契約するから、手を出してくれ』

「はい」

『精霊王オーベロンは、此の者を契約者と認める』

簡単に言うと、精霊王オーベロンの体が光り、その光りが穹の右手の中指に集まり、その場所に指輪ができる。

「これって、どうなってるんですか？」

『私と契約したから、指輪になって、小僧と行動を共にするだけだぞ。必要なだけの魔力を流してくれると、実体化して戦うこともできる』

「うーん、とりあえずは分かりました」



「と、まあ、そんなことがありました」

「それって凄いことですよ？精霊王の契約者なんて、100年以上出てきてません」

「あつ、やっぱり夢じゃなかったんですね」

「くそう、俺が精霊王狙ってたのに」

優が本気で悔しそうにする。

「僕の勝ちだね、優」

「大丈夫ですよ、ユウさん。精霊で負けても、まだ魔法があります」

「…そうだな。魔法で穹より凄いの使えばいいのか」

「はい！」

すぐに立ち直った優に、すぐさまフェルミは返事をする。

契約（後書き）

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

特にお気に入りと評価お願いします

初級魔法

「では、魔術の基礎を教えます」

「はい」「お願いします」

優は幼稚園児のような返事を返し、穹は丁寧に返事を返す。

「まず私は魔法しか使えないので、精霊術のソラさんはイメージだけ掴んでください」

魔法にはいくつかの属性がある。

代表的なものが4大属性の火、水、風、土がある。

それとは別に光、闇、雷、氷、無属性がある。

それぞれの属性には、初級魔法、中級魔法、上級魔法、最上級魔法がある。

例外として、無属性魔法にレベルはない。

そして、精霊術にもいくつか決まりが存在する。

精霊王を頂点として、火、水、風、土、光、闇、雷、氷の上位精霊が存在する。

下位、中位の精霊は呼び出しても実体化しないが、上位精霊になると実体化する。

そして、上位精霊になると呼び出すのに、合意が必要になる。ゆえに悪人が上位精霊を呼び出して天災を起こそうとすることはできない。

それぞれの属性の精霊は、その属性しか使えないが、精霊王のみ例外として、それぞれの属性を中位精霊ぐらい使えて、更に分解と再

生を使うことができる。そこが精霊王と呼ばれる所以である。

「魔法と精霊術の説明は以上です。そしてまずは精霊術ですが、教科書通りに言わせていただくと、上位精霊を呼び出すには精霊の名前を、下位と中位の精霊を呼び出すには頭の中でイメージするだけで大丈夫です。私は精霊術は使えないので、ここまでしか分かりませんが大丈夫ですか？」

「はい。方法さえ分かれば、後は僕が自分でやりますから」

「魔術学校に入れば専門的な部分も教えてもらえるので、続きは学校で教えてもらってください」

「分かりました」

申し訳なさそうに言うフェルミに、穹は優しく笑顔で答える。

「まずは初級魔法から入るので、右手を前に出して掌の上に炎の球体をイメージして下さい」

「おぉーすごい」

掌の上には炎の球ができていて、それを見て興奮している。

「ユウさん、さすがは勇者ですね」

「……できない」

「「えっ…」」

フェルミと優の声が重なる。そして声の主である穹の方を見る。

「なあ穹……できないって……これがか？」

「うん」

「それって……センスないんじゃない？」

「だよね」

穹がさっきよりも落ち込む。

「なあフェルミ、苦手な属性だから出来ないとかってあるのか？」

「そりゃたしかに上級魔法にもなれば得意属性しかできませんが、初級魔法は魔法が使える者なら誰でも使えますよ」

「じゃあ、俺は精霊術が、穹は魔法が使えないってことなのか？」

「普通の人はずです。あと、事実としてソラさんに魔法が使えるいので、おそらくはそうだと思います」

「だってさ。穹は精霊術しか出来ないらしいぞ」

「魔法のセンスはないんだよね」

穹がどんどん落ち込んでいくので、すかさずフェルミがフォローに入る。

「精霊術はこの世界で最強になれる可能性があります。それで充分

じゃないですか」

「世界最強……いいね」

穹がだんだん元気になっていく。

「優、精霊術を極めて、精霊術で魔法に勝つよ」

「望むところだ」

「じゃあ、僕は離れたところで練習してるよ」

「ああ」「あつ、はい」

穹が離れたところに行く。

「では続きですが、次は掌から水球を出してみてください」

その後も練習は続き、初級魔法は全属性一回目で使えるようになった。

次からは中級魔法も習うらしい。

魔法の練習も終わり、王宮にある2人の寝室

「なあ穹、精霊ってどのへんまで出せた？」

「僕は下位の精霊なら全種類出せたと思うよ」

「初級魔法は全ていけたから、俺と同じか」

「じゃあ優には魔法のセンスがあるんだね」

「魔法使いはけっこういるらしいからな、その中でトップってどうやったら分かるんだ？」

「最上級魔法を全属性使えたら最強なんじゃない？」

「たしかにそりゃ最強だな」

「あつても、最上級魔法って4大属性しかまだ確認されてないらしいよ?」

「じゃあ、他の4つも俺が作れば歴史上最強だな」

「だね」

「じゃあ、寝るか」

「そうだね」

その日から魔法の練習をして、優は全属性の上級魔法まで、穹は4大属性の上位精霊まで呼び出せるようになった。

そして、魔術の練習ばかりしていたので、地理や歴史を全く勉強してないことに気づいたので、魔術学校入学の一週間から猛勉強することになった。

初級魔法（後書き）

ただひたすらに魔術学校の話が書きたくて、超展開にしてしまったことを、今この場を借りてお詫びします。

誤字・脱字・質問があれば感想欄まで願います。

評価、感想、お気に入り登録よろしく願います。

入学式

「なあ、入学式って普通は4月じゃないのか？」

「4月だと毛虫が出るから貴族が嫌がるんじゃないかな」

「あっ、そうだな」

「えっ普通は5月じゃないんですか？」

入学式に行こうと王宮を出て、魔術学校までの道のりを歩く途中、優と穹の会話にフェルミがつっこむ。

「僕らのいた世界では4月にやるんだよ」

穹のは初めて会った人や、信用でしない人には敬語を使う。だが、フェルミとも半月以上の付き合いなので、敬語ではなく優に使うものと同じような口調になっている。

「珍しいですね」

「俺らからしたら、こっちのが珍しいんだけどな」

「そんなものですか？」

「そうだよ。それに僕達は入学式の日にとっちに来たからね」

「そういえば勇者の仕事って何かあるのか？」

「そうですねえ……」

優の問いかけにフェルミは少し考えるような仕草をする。

「ありません」

「「えっ!？」」

「どうしたんですか？」

「いや、仕事がないなら、どうして呼んだの？」

「仕事はないですが、戦争を起こさないための抑止力にはなります。勇者を相手にするだけでも、敵国の戦力はかなり落ちますから。それに、この国の勇者は一国の兵士が全員かかってきても勝てる。つて有名ですから、名前だけの勇者がいればそれでいいんです」

「名前だけでいいなら、別に召喚しなくても他の奴使えばいいんじゃないかったのか？」

「それはダメです。4国合同の魔術大会とかの国交を深めるイベントには勇者の参加が絶対です。その場で中途半端な人物を出しては、国の威信にかかる問題になります」

「そうゆうもんなのかね」

「じゃあ、他の国の勇者も召喚してるの？」

「他国の場合は、国内から選んでるらしいです。魔術大会での優勝者、王族の中で一番腕の立つ者、貴族院の話し合いで決定していま

すね。そして、その勇者はそれぞれが勇者の武器を持っています」

「僕らの腕輪も武器なの？」

「勇者の腕輪は変形する武器です。使い手の望む形態に変化します。そして、使い手の魔術を纏わせることも可能です。私は見たことありませんが、先代勇者は剣に魔法を纏わせてたらしいですよ」

「これってそうやって使うのか」

勇者の腕輪を見ながら言う優に、フェルミは驚愕の表情を向ける。

「もしかして知らなかったのですか？」

「「うん」」

「腕輪はどうして使い方を教えてくれなかったのでしょうか」

「本当は教えてくれたりせずに、知ってる人から聞いて使うのかもね」

「だな」

「残念ながら、私もそう思います」

15分ほど歩いたところで、大きな建物の前に到着する。
大きさは大学くらいあり、敷地もそれくらいはある。

「ここか？」

「そうですよ」

「でかいなあ」

「来るのは初めてですか？」

「王都から出たことないし、仕方ないじゃねえか」

「確かに外出しませんでしたね」

フェルミが顔を背ける。

これは、後ろめたいことがある者の態度だ。

「フェルミ？どうした？」

「いえ、何も」

「優、やめたげなよ。フェルミは僕達のカリキュラム設定をミスったことを、突かれるのが嫌で顔を背けてるんだから」

「ああ、そうか」

「分かってるから言わないで下さいよ！」

フェルミは涙目になりながら抗議する。

「いやあ、ついね？」

「ついね？じゃありません。ソラさんの性格がこんなに悪いとは思いませんでした」

「あー、穹の奴は基本的に猫被ってるからなあ。本性を出すってことは、フェルミが信用されてるってことだ」

「……それなら許しますけど、言葉には気をつけて下さいね」

「フェルミも無理のない計画をね？」

「あああああ、聞こえません。私は何も聞こえません」

フェルミはまるで小学生のような反応をする。

校内に入り、入学式の会場らしき場所を探す、正門からは少し距離があるらしい。

「あつ、じゃあフェルミの好きな人言っちゃうよ？」

「嘘です。すいません」

「なあ穹、フェルミの好きな人って誰なんだ？俺の知ってる奴か？」

「知ってるって意味なら、よく知ってると思うよ」

（本人なんだし）

「俺のよう知ってる奴って穹ぐらいしか知らねえぞ。ってことは穹か？」

「相手が僕なら、フェルミがこんなにバラされるのを、恥ずかしが

らないと思うけどね」

「それもそうだな。まっ別にいっか。俺には関係ねえし」

「……むしろ重要人物です」

「ん？何か言ったか？」

「なんでもありません！」

「俺なんかしたか？」

「うーん……強いて言うなら、乙女心を踏みにじった、かな？」

「とりあえず、悪い」

「そんな誠意のない謝罪はいりません」

「じゃあ、俺にどうしろと？」

顔を真っ赤にしながらフェルミは手を差し出してくる。

「……会場につくまで、手を繋いでくれたら許してあげます」

「ん？そんなことでいいのか？」

「はい」

手を繋いだ優の顔も真っ赤になっている。

それを見て穹はニヤニヤとニヤつきながら、2人を見る。

（そういえば、女の子と手を繋ぐのって、小学校以来じゃないか？
こんなに緊張するもんだったっけな）

（うう、どうしてユウさんは、そんなにいつも通りなんでしょう。
これじゃあ、私になんて全く興味なしじゃないですか）

「……………」

「……………」

（ヤバイ、この緊張で、この静かさは精神的に辛いぞ。何か話題を、
何か話題を。穹の奴、楽しんでないで、何か話せよな）

優は穹にアイコンタクトで、何か話せとの意図を伝える。さすがに
人生のほとんどもを共に過ごしてきたからか、穹は何を伝えたいのか
を理解する。

（何も話さなかったら、緊張してるのが伝わってしまうのではない
でそうか。何か話題を……。でも、いきなり手を繋がせたりしたら、
いくら鈍いと言っても、そろそろ私の気持ちを気づいてくれない
いですよね）

真っ赤になりながら手を繋いでいる2人を、穹はニヤニヤしながら
見つめる。まるで、悪戯でもする子供のような笑みで。

「なんだかそうしてると、カップルみたいだね」

「……………」

「……」

フェルミが顔を真っ赤にして俯いてしまう。優は穹を怒りの形相で見る。

それに穹は悪戯が完了した子供のような笑みを浮かべる。

（穹の奴、この場面での今の発言は地雷だろ？フェルミがかなり怒ってるじゃねえか）

（ソラさんはいったいどこまで私の心を抉れば気が済むんでしょうか。ユウさんもソラさんをあんなに睨みつけて、そんなに私とこ、恋人扱いされるのが嫌だったのでしょうか）

「ねえ2人とも、……もう付いたけど？」

「じゃ、じゃあ」

「は、はい」

優の方から切り出して、手を離す。

（あ、あぶなかったぜ。それより穹が何をしたいのか全く分からないんだが……）

（うう、やっぱり私は優さんに、女の子として認識してもらってないのですね。でも、私は諦めません。いつか絶対、私に告白させてみせます）

優は冷や汗を拭い、フェルミは決意を新たに、ガッツポーズする。

そして、長ったらしいと思わせて、それほど長くもない校長の挨拶を聞き、入学式は終了する。

ちなみに、優と穹とフェルミは同じクラスになったが、それはどこの国の、どこの王様が手を回したからだとは、3人とも知るよしもなかった。

入学式（後書き）

なんかラブコメ展開にもっていかれそうですが、魔術学校での話は、恋愛…魔術戦闘を1…1または、3…4ぐらいにしようと思っています。

まあ、他の作品よりはラブコメ寄りってぐらいですかね。

あつ、あと昼ドラ的展開とかは予定してないです。むしろやるつもりはないです。

まあ、その時の気分にもよりますが……。

あと、作者がハッピーエンドを望んでるので、悲しいヒロインは出さないつもりです。

最後に

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

クラスメイトと班決め

「えーっと、桜庭優です。趣味はなし。優って呼んでくれ」

「ユウさんは貴族じゃないことになってるんで、苗字はいりません」

「えっそうなのか?…優です。以上」

フェルミが自己紹介に小声で指摘してきたので、言い直す。

言い直した後の自己紹介で穹が苦笑いを浮かべる。

「穹です。優とは兄弟みたいなものです。よろしくお願いします」

穹が丁寧に自己紹介をして、その後も数人続き、優の隣に座るフェルミも無事に自己紹介を終える。

「じゃあ、今から訓練合宿の班を決めてもらいます。自己紹介も終わったことですし、各自がコミュニケーションを取って、6人の班を作ってください」

真面目そうな女性の担任の指示で6人班になることになる。

それぞれ数人は見知った顔があったのか、そちらに声をかける。

「じゃあ、俺達3人は確定ってことでいいかな?」

「僕は問題ないけど、フェルミは王族だし、貴族の人と組まなくていいの?」

「お父様はそれなりに面識がありますが、私はパーティーなんかで

の上辺だけの付き合いです。それほど親しいわけではありません。あつ、でも、幼馴染の子はクラスにいますね」

「じゃあ、呼んできたら？」

「そうします」

クラスのほとんどが立ち歩いて話しているが、優達は席を立たなかった。それはフェルミ以外にこの世界で面識のある人物がいなかった。

そこに、1人の少女が歩いてくる。

「あつ、あの、あなた達も平民出身ですよね？」

「『も』ってことは君も？」

「そ、そうです。それで、……平民同士で同じ班になればなあ、って思いました」

胸に掛かるか、掛からないぐらいの茶色の髪に、フェルミほどではないが整った顔立ちをした小柄な少女が話しかけてきた。

「このクラスに平民って俺らだけなのか？」

「あつ、はい。他は貴族の方か、それに使える方のみで、完全に平民は私達だけです」

平民でも貴族の援助を受けて、将来はその家に仕えることもある。目の前の少女以外の平民は皆そのようにして、魔術学校に通っているのだろう。

「僕はいいけど、優は？」

「いいんじゃないか。フェルミも賛成すると思うし、名前……なんだっけ？」

「あつ、すみません。わたしはエリンっていいです。ユウさんとソラさんですよ。」

「はい、合ってますよ。それでエリンさん。貴族の援助なしで、どうやって魔術学校に通えてるんですか？」

「それはですね……商人をやってる家系なんですけど、貴族よりの平民なんで蓄えはわりとあるんですよ。それに私は家を継げませんし、魔術の才能がありましたから、魔術師として生きていこうと思ったんです」

「そうでしたか。突然聞いたりして申し訳ありません」

「いえいえ。では、そちらはどうやってなのですか？」

「あー、俺らはな？」

「うん」

エリンの背後から来る2人の人物を見て、2人とも説明に困る。

「ユウさん、ソラさん、連れてきました。ん？この子は誰ですか？」

「「新メンバー」」

エリンを見ながら言うフェルミに、2人ともフェルミを見ながら答える。

「うえ!？」

何を言いたいのかわからない声を漏らしながら、エリンはフェルミの顔を見ながら慌てる。

「あつ、そうでしたか。これからお願いしますね」

「こここ、こちらこそよろしくお願いいたします王女様」

「そんなに緊張しないで下さい。あと、私のことは気軽にフェルミって呼んでください」

「そそそ、そんな恐れ多い。お、王女様を呼び捨てになどできません」

「私は気にしませんのに……」

エリンの反応を楽しんだ後に、優が声をかける。

「ってことで、俺達は王様に援助されてるんだ」

「こここ国王様に!？わたしは何と凄い方に声をかけてしまったのでしょう」

「僕ら自体は凄くないですよ。それに、僕らは王様に保護されてるみたいなもんですから」

「そ、そうなんですか」

エリンがホッとして胸をなでおろす。

さっきから慌てているエリンが小柄な体軀からか、どうも幼く見えてしまう。

その様子をフェルミの後ろから顔を覗かせる少女が見ていた。

「ねえねえフェルミ、あんたの本命はどっちなの？」

「アイラ！？な、何を言ってるのよ！」

「えっ、だって2人とも凄いカッコイイじゃない。で、どっちが本命なの？」

「言いません！」

顔を赤くしたフェルミが拗ねて顔を背けてしまう。

穹は面白がって、優にバレないように優の方を指差し、それに気づいたアイラが優を見てニヤニヤする。

「それで、その子がフェルミの幼馴染か？」

「あっ、うん。あたしはアイラⅡクリスティー。王国の魔術騎士団の団長の娘で、フェルミの幼馴染よ」

「俺は優で、こっちは穹だ。あと、その子がエリン。よろしく」

「こっちこそよろしくね。でも、あと1人足りないわね」

「誰か呼んでくれるか？俺らは知り合いいないから」

「うん。分かった」

この、赤い髪を肩に掛かるか掛からないかぐらいの長さにして、整った容姿の中性的な雰囲気をもし出して少女がフェルミの幼馴染のアイラらしい。

アイラは教室中を見渡して、すでに4人ほど男子が集まったグループの中に、目的の人物を発見する。

「ヒューイ！」

「アイラさん！？」

「あんた、婚約者なんだからこっちの班に来なさい！」

「無茶言わないで下さい。自分はまだ班を決めていますから」

「うん、分かった。でも、こっちの班に来なさい」

「分かってないじゃないですか！」

「分かるのと納得するのは別よ。いいから来なさい」

「はあ、そう言うことらしいので、すいませんが失礼します」

ショートカットの金髪に、どちらかと言うとイケメンの部類に入る青年がアイラの婚約者のヒューイ。

ヒューイはメンバーに出て行くことを伝え、アイラ達のいる方までとぼとぼと歩いてくる。

「じゃあ、これで6人揃ったな」

「けっこう無理矢理感はあるけどね」

「うう、わたしだけ立場が変です」

「私達は気にしないから大丈夫ですよ」

「そうだぞ、あたしから見たらヒューイの方が立場ないから」

「それってどういう意味ですか？あつ、自分はヒューイⅡフラムスティードです。長いのでヒューイとお呼びください」

優、穹、エリン、フェルミ、アイラ、ヒューイの順で言う。

そして、誰もヒューイの突然の自己紹介には何も言わず、そっとしてあげている。

「意外と強そうだね」

「確かに、ユウさんとソラさんがいれば心強いです」

「いや、フェルミ、ソラは強いが、俺はまだフェルミに勝てないと思うぞ」

「そうですか？私はユウさんが本気になれば負けると思いますが」

「知り合い相手に本気で戦えないから、今は負けてるな」

2人で話し始めたところに、アイラがニヤニヤしながら入ってくる。

「公共の場でイチャつくな！」

「い、イチャついてなどありません。アイラはいつからそんなに面白いジョークが言えるようになったのですか？」

「ジョークねえ？フェルミはユウのこと好きなの？」

「そ、そんなこと言ったらユウさんに失礼です」

「ふーん、否定はしないんだ」

「そろそろ虐めるのは可哀想ですよ？」

アイラはニヤニヤしながらからかっていたが、同じくニヤニヤした穹に止められる。

フェルミは顔を真っ赤にして俯いてしまった。

「フェルミ様がユウ君を好きで、アイラさんがヒューイ君の婚約者」

エリンは小声でぶつぶつと状況を整理している。

周りから見たら今のエリンは小動物を連想させて、かなり可愛いだろう。

「あー、何この可愛い生物。食べちゃいたい！」

「ア、アイラさん！？」

「いいじゃない、いいじゃない。女の子同士なんだからさあ」

「いけませんよ！」

アイラは可愛いもの好きなのか、エリンに抱きついている。

「自分は目立ちませんが。頑張るのでよろしくお願いします」

「あっ、うん、頼む」

無理矢理連れてこられたことに、半ば開き直ったヒューイが優によく分からないアピールをする。

「意外とこのチームだと何とかなりそうだね」

「だな」

優と穹はそれぞれクラスという空気に懐かしさを覚えるのだった。

クラスメイトと班決め（後書き）

次回からは訓練合宿でキャンプ行きます！

先に目的を言っておくと

- 1、クラスメイトとの親睦を深める。
 - 2、クラスメイトの実力を知り、より精進しようと努力すること。
- ですね

ってことで、読んでいただきありがとうございます。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

訓練合宿？

「そう言うわけで、今日から2日間合宿です。とりあえず明日まで生き残ってください。じゃあ解散」

パンッと手を叩き、それが合図なのか他の生徒が皆それぞれ適当に歩いていく。

「なあフェルミ、これって合宿だよな？」

「そうですよ」

「サバイバルの間違いじゃねえよな？」

「違いますよ。サバイバルはまた別にあります」

「とりあえず明日まで生き残れ糞ヤローども、って解釈していいんだよな？」

「そこまで酷いか知りませんが、概ね合ってると思いますよ」

「そうか……」

優は珍しく落ち込んでいるようだ。理由は分からないが。

「優って昔から、こう言ういかにもめんどくさそうなの嫌いだもんね？」

「ん？ ああ確かに昔から嫌いだったかもな」

「じゃあ、どうする？全員で協力する？それとも個人戦？」

「わ、わたしは皆さんと協力したいです。まだ死にたくないです」

「あたしはどっちでもいいよ」

「自分も夜は安心して寝たいので、夜だけ一緒にいいです」

「私もヒューイさんと一緒に」

エリン、アイラ、ヒューイ、フェルミの順で発言するが、けっこう見事に意見が分かれる。

「俺はどっちでもいいぞ」

「僕もどっちでもいいけど、間を取って夜だけ一緒にいいよね？」

「ヒューイ、襲ったら殺すからね？」

「じ、自分は襲いませんよ」

慌てて否定するヒューイに、アイラがジト目で見る。

「ふーん……まあいいけど。それで集合場所は？」

「日が沈むところに、ここでいいんじゃないか？」

「優にしては珍しくまともな意見だね。じゃあそれでいい？」

全員がそれぞれ頷いて、全員適当に森の中の散策を始めた。
この訓練合宿は、冒険者が依頼を受けて討伐に行ったりする森で普通に行われてるため、魔獣もそこそこに強いのが出たりするのだ。



「何かいねえかな」

全員と別れてから10分ほど優は1人で森の中を探索していた。
この合宿では食料も自分で調達しないといけないので、魔獣を倒したりして食料を調達しないといけないのだ。

ガサガサ

「おっ!？」

テンプレだが、優のはるか前方から何か来るのが分かる。

「グガアアアアア」

(えっ、何この声? 威嚇なのか? もしかして、めっちゃくちゃバイのが来てるんじゃない?)

声を聞くまではドキドキしていた優だったが、今は別の意味でドキドキしていた。

そして、目の前にその姿を現す。

「えーっと、その……人違いです」

それだけ言って回れ右。駆け足前、進め！で一気にかけていく。
魔獣と言うより魔物の外見は、大きさが5mはあり、人型で緑の体に赤い目があった。

通常の冒険者が討伐依頼を受けるゴ布林よりも、更に上位に位置するオークゴ布林だったのだ。

オークゴ布林の討伐は通常Bランクの冒険者からで、魔術学校の一年生が簡単に討伐できるものではない。

それに

「あんなの食うとこねえじゃねえかよ」

そう食べる場所がないのだ。

って言うよりも食べれるところはあるかもしれないが、とても食べる気にはなれない。

「グガアアアア」

オークゴ布林はまた意味の分からない吼え方をして、優を追いかける。

「くっそお」

<カマイタチ>

優の手から放たれた<カマイタチ>がオークゴ布林の足を捉えるが、皮が切れた程度で特にダメージはない。

「硬すぎだろ！」

<エクスプロージョン>

火の上級魔法でオークゴブリンを何度も襲う。

5分ほどずっと<エクスプロージョン>したところで、オークゴブリンの生死を確かめる。

「おっ、死んだか」

緑だった体は真っ黒になっており、ところどころ体の一部が無くなっていたが、人型をした炭の塊にしか見えない。

「あーっ、しんど。何か見つけて帰らないと穹の奴がうるさいよなあ」

そう言って、優はまた食料探しの探索に出た。



優がオークゴブリンと戦った4時間後、穹は何故か森から山岳地帯に来ていて、その魔物に遭遇していた。

「あらまあ、道に迷ったと思ったら、変なのに遭っちゃったよ」

そう言った穹の目の前にいるのは大きさだけで15mはある怪鳥だった。

某狩りのゲームに出てくるヤ○クックに似ているが、決してヤンク○クではないと言うことにおこう。

穹を見るなり、空へと飛び、口から炎を吐いて攻撃してくる。

「えーっと、とりあえず新兵器試してみようかな。銃<ガンナー>」
穹の声と共に勇者の腕輪が光り、その姿を長銃に変える。

「あのサイズの魔物に効くのか試さないかね」

<凍結弾>

氷の下位精霊を纏った弾が放たれ、怪鳥に命中する。
命中した場所を中心に、半径1mほどが凍りついているが、大きなダメージは与えていないようだ。

<炸裂弾>

「ブレイク」

火の下位精霊を纏った弾が、怪鳥の手前で、穹の声と同時に大きな炎を巻き上げる。
炸裂弾の爆炎の直撃をくらった怪鳥はけっこうなダメージを負ったようで、さきほどもでのような素早い動きはできないでいる。

「もう一発炸裂弾食らわせれば死ぬと思うけど……最後に大技試してみようかな」

<水龍弾><放電弾>

水の下位精霊を纏った水龍弾と、雷の下位精霊を纏った放電弾が、
ほど同時に撃たれる。
放たれてすぐに水龍弾は、水でできた5mほどの水龍のような形になる。

その中に放電弾が入ったまま、まっすぐに怪鳥の方へ飛ぶ。

<ブレイク>

怪鳥まで3mほどのところで放電弾から、かなりの雷が放電される。どンドン水龍が小さくなり、怪鳥の目の前で水龍の姿は無くなった。

<ブレイク>

放電弾が放電した時に撃っておいた炸裂弾から、爆炎が放たれ、それがすぐに大きな音と共に大爆発を起こす。

「やっぱりできた。でも、威力が強すぎるから至近距離でやったら自殺行為かな」

最後の特技は、水龍を放電弾で電気分解し、怪鳥の周りに大量にできた水素に炸裂弾の爆炎が引火して、大規模な水素爆発を起こしたのだ。

一瞬の出来事で怪鳥は真っ黒にはなっていないものの、全身が酷い火傷ですでに死んでいた。

「これなら食べれるかな」

<重力弾>

土の下位精霊を纏った弾を怪鳥に撃ち、重力をほぼ0にする。効果は一時的だが、何度も繰り返し返せば1人でも運べるのだ。

「はぁ、こんなに食べれるかな」

そう言って穹は怪鳥を担いで、さらに4時間かけて戻るのだった。

それを見た他の生徒は、怪鳥が大きすぎて穹が見えず、怪鳥が現れたと大慌てだったらしい。

訓練合宿？（後書き）

はあ、優の戦い方が普通です。けっこうショックですね。
捻ろうにも、捻れない戦い方です。王道すぎですね。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

訓練合宿？

「なあ穹、その鳥どうしたんだ？」

「迷ってたらいきなり襲われたから、とりあえず食べれるかなって思ってたって帰ってきた」

特に変わったこともないかのように優と穹が話す。

他のメンバーはそれを呆れて声も出ないと行った表情で見ている。そこで、今まで魔術を教えてきたからなのか、一番驚きの少なかったフェルミが代表して声をかける。

「穹さん、その魔獣はデスフレアと言ってますね、冒険者が山岳でのクエスト時に炎のブレスで殺されてるから、そんな名前で呼ばれてるんです。それにデスフレアは冒険者でもCランクのパーティー、または個人でもAランクレベルでないと普通は倒せませんよ」

「……デスフレアなんて自分は初めて見ましたが、さすがに大きいですね」

「あたしも自分でそれなり強い方やと思ってたけど、さすがにコレには勝てないわよ」

「こ、こんな大きな魔獣初めてみました。穹君凄いです！」

フェルミの後に、ヒューイ、アイラ、エリンとそれぞれ感想を述べる。

その中で2人だけ違う意味で悩んでいた。

「なあ穹、これってどうやって食うんだ？」

「焼いたらいいんじゃない？鳥だし」

「でもよ、こんなでけえ鳥初めてだぜ？味付けも変えねえと途中で飽きるだろうしな」

「そこは優に任せるよ。優の方が料理得意だしね」

他のメンバーは2人ってほんと仲いいな、とでもいいかげな目で見ている。

この後にその矛先が自分に無垢とも知らずに……。

「他の奴の方ができるかもしれねえぜ？」

「じゃあ聞いてみれば？」

「こんなかに料理が得意な奴はいるか？」

2人の会話を見ていた全員が、周りを少し見てから答える。

「私は王族なのでしたことがないですよ」

「あたしやったことないわ。公爵家だししなくてもいいしね」

「お、お菓子なら少しはできます」

「自分に聞くのは野暮ってもんです」

フェルミとアイラは貴族だから必要ないとのこと。エリンはお菓子

しか作れないらしい。
ヒューイに至っては……キッチンの中も見ることがないかもしれない。

「らしいよ？ 頑張ってね料理長」

「穹、お前も少しは手伝え！」

「僕は調達してきたからいいんじゃないの？ それより優は何も捕まえなかったの？」

「いや、俺は……アレを倒したんだが……アレはさすがに……食べんだろう？」

「……確かにね、僕もアレは食べたくないよ」

珍しく歯切れの悪い優の態度を、オークゴブリンの姿を見て納得するのだった。

真っ黒に焦げてるが、さすがに5mはある人型の魔物など食べたい人などいないだろう。

ヒューイとアイラは呆れ顔を浮かべ、エリンは驚いて声もでないらしい。

「……見なかったことにして、デスフレアの話が続けよう」

アイラの呼び掛けに、全員が無言で元々そのつもりだったのか頷く。

「油とか調味料がないから唐揚げはできないし……、焼き鳥とかスーぷ系しか無理だと思うよ」

「唐揚げって何ですか？」

「「えっ!？」」

フェルミの疑問に優と穹が同じような反応を示す。それとは逆にフェルミ、アイラ、ヒューイ、エリンはそれが普通の反応のように、答えが返ってくるのを待っている。

「唐揚げって言うのは……僕らの住んでた国にあった料理だよ」

「そ、そうだぜ」

フェルミは元の世界の料理だと分かっているので、別に異世界から来たことを隠さなくてもいいと思っているのだが、2人は違ったようだ。

穹は淡々と語っているが、優は嘘を誤魔化す子供のような雰囲気をしていた。

穹は絶対に嘘が上手いが、優は嘘をついてもすぐに見つかりそうだ。

「優と穹はどここの国の出身のですか？」

「えっ!？」

「えーっと……極東って言われるくらい、かなり東に行かないと着かないかな？」

「疑問系なのが気になりますが、とりあえず遠いところから来たことだけは分かりました」

ヒューイの質問はしてくる予想はできる質問だが、いざ言われる慌

ててしまい、穹も嘘を誤魔化す子供のような雰囲気になってしまった。

「もうめんどくせえから丸焼きでいいんじゃないか？」

「ちゃんと中まで火を通してね」

「私は本来ならテーブルマナーを損ねるような行為はどうかと思いますが……優さんが作るのであれば食べたいです」

「あたしはそれでいいよ」

「自分もこの際食べれば何でもいいです」

「わ、私もそれでいいです！」

アイラとエリンは賛成、ヒューイはお腹が空きすぎてるらしい、フェルミに至っては特に触れない方がよさそうだと、2人は感じた。

「よし、でも俺がやると焦げるから、誰かやってくれよ」

「優さんが焼くのではないのですね……分かりました。ここは私の手料理を食べてもらいます！」

「あっ、うん。がんばってくれ」

フェルミの宣言に優は半ば適当に返してしまう。

「火加減が分かりませんが……いきます」

<フレア>

フェルミが火属性の初級魔法でデスフレアを焼く。
だが、フェルミ以外の全員が同じ感想を今持っていた。

「火小さすぎだろ！？こんなんじゃ、朝になっても焼けねえよ！」

「なっ！？やっぱり火が小さかったのですね……やっぱり私には無理みたいです。誰かやってください」

「……はあ、じゃあ僕がやるよ。^{ガンナー}銃」

誰も料理しようとしないので、穹が溜息をつきながら、勇者の腕輪を銃形態にする。

<竜巻弾>

穹の銃から放たれた、風の中位精霊を纏った弾がデスフレアのちょうど目の前までくる。

「ブレイク」

<式式カマイタチ>

弾がデスフレアを包むほどの大きさの竜巻になる。
そして、その中のデスフレアがカマイタチで斬られていく。

「危ないから離れててね」

<炸裂弾>

「ブレイク」

カマイタチの竜巻の中で炸裂弾から、大きな爆炎が出る。
竜巻が爆炎を巻き込み、炎の竜巻になる。

「そろそろいいかな」

穹がそう言うのと竜巻が小さくなっていき、皿代わりに取っておいた
大きめの葉っぱの上に集まって落ちていく。

「さすが穹、いいかんじの焼き加減だな」

肉の見ながら優が感想を述べる。

「あんな武器は見たことはありませんが、凄いです。精霊術をほとんど
完璧に使いこなしてますね」

「デスフレアを倒したのは本当みたいね」

「こんなに細かいコントロールができるとは凄いですね」

「わ、私はもう何を見ても驚きません！」

フェルミは多少驚いていたものの、主に銃に驚いていたらしい。
アイラはデスフレアを倒したところから疑ってたみたいだ。

ヒューイは武器よりも精霊術に驚いている。

エリンは口では驚かないと言いつつも、顔はかなり驚いている。

「じゃあ食うか」

「そうだね」

一口では食べれないが、かなり小さく切られた肉は案の定完食はできなかったので、放置していたら何故か朝には無くなっていた。

訓練合宿？（後書き）

久しぶりですが投稿します。

作者自身がキャラの感じを忘れつつあったので、少々キャラが変わってるかもしれません。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

訓練合宿？

「優起きて」

「ZZZ」

「返事がない。ただの屍のようだ。……じゃなくて、起ーきーろー！」

穹が無言に笑顔を浮かべて、優の腹の上に足を向ける。

『起きろ』の声とともに足を思いつきり優の腹に命中させる。

「むぐっ、い、いきなり何すんだよ！」

「優がいつまでも起きないから仕方なかった」

「だからって踏むことないだろ！？」

声にならない声を上げた優が、必死に追求するが、穹は急に真剣な表情になる。

「・・・」

「何か言えよ！てか、そんな真剣な顔して何かあったのか？」

「……肉が……朝用を取っておいた肉が無くなった。優以外に犯人は考えられない」

穹が涙目で言うが、優には全く心当たりがない。

「一つ言うが、俺じゃない！外に置いてたから魔獣にでも食われたんじゃないのか？」

「夜通し見てなかった優が悪いと思います」

片手を挙げながら穹が言い、優が呆れた顔をする。

「何で俺が不眠番なんだよ！てか誰が不眠番してたんだ？」

「……決めてない」

「全員が寝てたのに、よく魔物とかに襲われなかったな。って言いなくなるぞ、それは。」

呆れ顔のまま優が言う。ちなみに他のメンバーは昨日歩きつかれたのか、就寝中である。

「優は頭悪いから、何度も徹夜で受験勉強してたし、優に任せたことにしようと思ったんだけどなあ」

「今『つもり』って言ったよな？」

「……言っていない」

「目逸らしながら言う奴のことは信用できねえぞ」

優と穹がいつものように話していると、モゾモゾと何かが動く。

「アレ？二人とも起きるのが早いですね」

「おはようフェルミ、僕たちは元の世界では、新聞って言う情報誌の配達やってたから朝は早く目が覚めるんだよ」

（今の時間は7時くらいだから、別に僕たちじゃなくても起きてると思うんだけどね）

「そうでしたか。では、他の方も起こしましょうか」

「あつ、よろしく。じゃあ、僕と優は朝ご飯取ってくるよ」

フェルミは視線を一旦肉の置いていた方を見て、肉がないのを確認してから、他のメンバーを起こしに行く。
それに伴い優と穹も朝食探しの旅に出る。

「優、肉も飽きたし魚にしようよ」

「俺はまだ食えるけど、魚でいいか」

「じゃあ……川はこっち」

「なんで方向音痴の穹が川の位置が分かるんだ？」

優にとって穹は今までで一番一緒にいる時間長い人物だ。
その穹が方向音痴なことも知っているのだ
それ故の疑問だった。

「あー、僕って精霊術師でしょ？だから、精霊がどの辺りに集まっ

てるのが、何となく分かるんだ。それで、水辺付近は水の精霊が少し多く集まるから分かったただけだよ」

「精霊術って便利だな」

「精霊術は物に纏わせるのが前提だから、魔法の方が使い勝手は格段にいいと思うけどね」

「ああ確かになあ。精霊術師って不意打ちだと弱そうだしな」

優の発言に、一瞬だけ穹がその表情を歪める。
自分が精霊術師だからか、今の発言は精霊術よりも魔法の方が優れてると言ってるように聞こえたのだ。

「そうでもないよ？精霊が敵意とか魔力を感知して、必要な時は教えてもらうようにしてるから」

「もう何でもありだな、精霊術って……」

「精霊王と契約してるから、精霊を自由に使えるんだよ」

「精霊王と契約とか……穹って実はチート主人公なんじゃないか？」

「それを言ったらこの勇者の腕輪貰ってる時点で、二人共けっこうチートだよ」

「うっ、確かにそうだな。おっ、確かに川に着いたぞ」

現時点では穹の方が強いと思ってるので、話題を変える。

「『確かに』ってことは信じてなかったんだね」

「まあ、それはいいじゃねえか。それよりさ、魚捕ろうぜ」

また、話題が戻りそうだったので、別の話題に変える。

「全部で6匹は捕らないとね」

「今回は俺がやる」

「じゃあ、僕は見てるから、できたら呼んでよ」

そう言って穹が川原の石に腰を下ろす。

その様子を見ていた優が、思わずため息を漏らす。

「うっし、やるか」

優は体内の魔力の一部を指先に集中させる。

<スパーク>

指先から雷が放たれ、水中を流れる。

本来は相手を麻痺させて、しばらく無力化させる補助系の魔法だが、川の魚にとってはそれだけでも、けっこう喰らうらしい。

「よし、後は魚を回収して帰るか」

水面に浮かんできている魚を優が全て拾う。

数にして10匹ほどで、少し多いが食べれない量じゃない。

「穹、帰ろうぜ」

「あっ、もう終わったんだ」

「俺を誰だと思ってんだよ。勇者だぜ？」

「それを言うなら僕もだけどね」

穹は全く魚を持たず、優が全て持って皆が待ってる場所まで行く。

「なあ穹、何か強い魔力を感じないか？」

「精霊が教えてくれたから分かってるよ。でも、そんなに大きな魔力は魔術学校にはいないし、かなり上位の魔物か何かだろうね」

「魔物だと思うが、その方向が問題だ」

「少し離れてるから距離までは分からないけど、どこにいるの？」

「俺達の拠点だ」

それを聞いて、驚きの表情を表す。

優がすぐに魔法の準備をして、穹の体に残ろから抱きつく。

「な、何やってるの？」

「行くぞ」

<ウイング>

抵抗する穹を無視して、優は穹を抱えたまま飛ぶ。

全力で飛んだので、数秒で到着した。

「あんなの反則だろ」

「僕もあれは無理ゲーだと思うよ」

優と穹の視線の先にいるのは、ドラゴンの部類に入るが、ドラゴン種の中では最弱のワイバーンだ。

最弱と言ってもドラゴン種なのでA Aランクに位置する。他のドラゴンとなるとSランク以上なので、まだマシと言えばマシだ。

「さて、どうやって倒そうか」

二人の視線の先では、他のメンバーが魔法や剣術で応戦していたが、全くダメージを負わせている感じではない。

訓練合宿？（後書き）

次はワイバーン戦で、次の話で訓練合宿は終了予定です。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

訓練合宿？

「アレってどうやったら死ぬんだろうね」

「おいおい他人事かよ。お前が精霊王出したら済む話じゃないのか？」

「ああそれは無理。夢の中では何度か話したけど、呼んだらすっごい魔力消耗して、その日は動けなくなっちゃうから、ほんとにヤバイ時だけ呼ぶようにって言われてるんだ」

「精霊王って使い勝手悪いな」

「本人も気にしてるみたいだから、言わないであげて」

「あっ、うん。悪かったな」

その場にいない精霊王に同情する2人。
フェルミ、アイラ、ヒューイは未だにワイバーンと戦っている。

「ん？おい穹、エリンがいねえぞ」

「あれ？ほんとだどこにもいない」

そう話ながら、風の飛行魔法を解除して、やっと3人の側に降りる。

「やっと帰ってきたわね。早くアレ倒して！」

「エリンは？」

「エリンさんは……もう……うつ、うつ」

アイラの言葉に、優が質問で返し、フェルミが答える。

「えっ？もしかしてエリンって食べられた？」

「……エリンさんはワイバーンを見た瞬間に……動かなくなっていました」

「それでエリンってどこにいるの？」

「あちらに」

フェルミに言われた方を見る。

そこには倒れたまま動かないエリンの姿。
優がエリンの側まで寄り生死を確かめる。

「……気絶してる」

「はい？」

優の言葉に穹が思わず聞き返してしまう。

「だから気絶してるんだって。エリンの場合……ありえるだろ？」

「……たしかにありそうだね。でも、実際にやってのけるとは思わなかったよ」

「驚きすぎて許容量を超えたから、こうなったんだな。可哀想に」

「まだ死んでないけどね」

優がエリンに掌を合わせるので、穹がツツコミを入れる。

「とりあえず、アレを倒さないとな」

「無理です。さっきから何度も魔法攻撃を加えてるのですが、大したダメージは与えてません」

フェルミ達3人の消耗のレベルから考えても、かなり強いと考えられる。

それにダメージをほとんど与えていないのも気になるところだった。

「ワイバーンって防御魔法とか使うの？」

「使いませんが、鱗が成長に伴って折り重なって、物理防御が高く、その鱗も魔力に対する耐性がついてるので、魔術によるダメージはかなり軽減されてしまうんです」

「攻撃はどんな攻撃なの？」

「ドラゴンの種類にもよりますが、ワイバーンは火の魔法を使います。現にあのワイバーンは火のブレスを使っていました」

穹がフェルミからワイバーンの情報を聞き、作戦を考える。

だが、優も穹も基本はめんどくさがりなので、穹は自分があまり前

線に立たない方法を考えている。

「ねえ優、僕の精霊術ってね、威力よりも手数なんだあ」

「魔力を多く込めればいいんじゃないのか？」

「うん、そうなんだけど、それだと疲れるんだよねえ。だからさあ優、派手に突っ込んできて」

「自分がめんどうなだけだろ？」

「そうだよ。だからさあ優、派手に突っ込んで、勝つか殺されるかしてきてよ」

笑顔で酷いことを言う穹に、誰も笑えなかった。

「はあ、もう何言っても無駄だろ？なら俺が突っ込むけど、魔法の対処までは手が回らねえぞ？」

「優は物分りがよくて助かるよ。魔法の対処は僕が全部やるから、安心して散ってきてよ」

「分かったよ。俺が合図したら突っ込むからな」

他のメンバーは穹の毒舌に冷や汗をかいていた。

「3」

「2」

「1」

「0」「行ってらっしゃーい」

走りだす優に、穹は気の抜けた見送りをする。

「形態変化、アクティブブーツ」

優の声と共に、勇者の腕輪が光り、その光が足に収束しブーツが出来る。

「おお、さすが優だね」

アクティブブーツを装着した優は、機動力が増し、スピード、跳躍、ステップが通常よりも桁違いに上がっている。

「じゃあ、僕も準備しますか。銃」ガンナー

穹も勇者の腕輪の形態を変化させ銃形態にする。

「遅いぜ」

<カマイタチ>

ワイバーンの後方に回り込んだ優の攻撃は、全てその鱗に弾かれる。

「ちっ、やっぱり初級魔法じゃ効かねえか」

「おい優、魔力に対する耐性ってことは、防げる限界があるんだし、大技で片付けてよ」

「無茶言うんじゃ、って穹あぶな」

言いかけて、続きを言うのをやめる。

優の魔法でワイバーンの意識が優にあったのだが、穹の声で穹の方に移っていたのだ。

ワイバーンは穹に向けてブレスを放ったが、穹の銃弾が当たった瞬間に炎の塊は消えてしまった。

<ウイング>

優が空を飛んで、ワイバーンの上空を通って、穹の真横まで行く。無傷だと分かっている、その目で確かめたかったのだった。

「怪我はねえみたいだな」

「あの程度じゃ怪我のしようもないよ」

「だな」

ワイバーンがいつの間にか飛んでいた、優も再び空へと飛び立つ。

「うおっと、あぶねえ」

ワイバーンは魔法攻撃ではなく直接攻撃を仕掛けてくる。

真っ直ぐに猛スピードで飛んできての、翼での攻撃。

単純だが、当たればかなりのダメージだろう。

ワイバーンは今度は炎のブレスを放つ。

<魔力分解弾>

穹が地上から闇の中位精霊を纏った弾を放ち、炎の塊に当たると、その魔力が分解され空气中に霧散していく。

だが、炎のブレスの消えた中からはワイバーンが再び翼撃を加えようと突っ込んできている。

すでに、優のよけるタイミングではない。

「優、あぶない」

穹が叫ぶ。他のメンバーはレベルの戦いのせいか全くついていけずに言葉もでない様子だ。

ワイバーンの攻撃が直撃する。

バチッ

バチバチ

優の体が放電し始める。

「えっ、優の魔法かな？」

穹も何が起きたのか分かっていなかった。

<アルターサンダー>

ワイバーンの真後ろに無傷の優が現れる。

ワイバーンが攻撃した優は、優が作った雷の分身。

<サンダーランス>

優が右手を横に突き出す。

分身の雷が本物の優の右手に、一直線に飛んでいく。

間にいたワイバーンの胸に穴を空けて。

胸を貫かれたワイバーンは力なく地面に落下する。

それに続いて、優も地面に降りていく。

「ビックリしたか？」

「何も言わずに次やったら、僕が殺すからね」

「何も言えませんでした、泣きそうでした」

「心臓に悪いわ」

「行事で死人はまずいなって思いましたよ」

軽く怒った様子の穹に、泣きそうな顔のフェルミ、胸を抑えているアイラに、少しずれたセリフのヒューイがそれぞれ優に言葉を投げかける。

エリンは未だに気絶から覚醒しないらしい。

「お昼に湖に集まって帰るんだよね？」

「そうです」

「じゃあ、飯食ったら時間的にピッタリだな」

穹の質問にフェルミが答え、続いて優が話す。

この後は優と穹で捕ってきた魚を食べて、いろいろあった訓練合宿は終了した。

ちなみに、ここまで上位レベルの魔物と戦ったのは、優と穹達の班だけで、他はかなり弱い魔物や魔獣しかいなかったらしい。

訓練合宿？（後書き）

訓練合宿終わりですね。

次は魔術学校での日常を書こうか、中間テストにしようかで迷い中ですね。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7364y/>

2人で1人の勇者様

2011年12月10日18時57分発行